

難治性疾患克服研究の対象となっている123疾患について

主任研究者； 小長谷 正明

疾患名； スモン

1. 初代研究班発足から現在までの間の研究成果について（特定疾患の研究班が独自に解明・開発し、本研究事業として公表したもの。なお、原則他の研究事業等に依存していないもの。）

（1）原因究明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1	1970 年度 甲野禮作	原因がキノホルム中毒であることが強く示唆された	
2	1972 年度 甲野禮作	原因がキノホルム中毒であることが断定された	
3			

他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

（2）発生機序の解明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1	1972 年度 甲野禮作	犬にキノホルムを投与して、スモン類似の疾患を作ることに成功した。	
2	1974 年度 重松逸造	ビーグル犬にキノホルムを投与して、スモン類似の疾患を作ることに成功した。	
3			

他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

(3) 治療法(予防法を含む)の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1			
2			
3			

他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1	1985 年度 祖父江逸郎	ノイロトロピンの有効性を確認した。	
2			
3			

他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

ウ その他根本治療の開発について

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1			
2			
3			

他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

2. 「1」以外で、国内、国外を問わず、研究成果の現在の主な状況について

(1) 原因究明について(画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1			
2			
3			

(2) 発生機序の解明について(画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1			
2			
3			

(3) 治療法(予防法を含む)の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1			
2			
3			

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			

ウ その他根本治療の開発について

	時期	内容	文献
1			
2			
3			

3.現時点において、次の事項について残された主要な課題及び今後の研究スケジュールについて

(1)原因の解明について

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1			
2			
3			

(2)発生機序の解明について

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1	キノホルム神経毒性の機序	中	
2			
3			

(3)治療法(予防法を含む)の開発

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1	再生医療によるキノホルムで障害された神経系の再生	少し遠い	今後検討
2			
3			

4. 重症化防止対策について

大多数の患者に対して外来通院によって症状のコントロールが可能な治療法（重症化防止のための治療法）の確立

	重症化防止のための治療法確立について解決すべき課題	5年以内に解決できる可能性	解決不可能な場合の理由	左記理由を解決していくスケジュール
1	鍼灸・東洋医学的治療	大	効果不十分	さらに条件を検討
2	しびれに対する対症療法の開発	大	効果不十分	さらに色々な薬物を検討
3	リハビリテーション	大	患者の高齢化	プログラムの検討
4	転倒の予防	中	患者の高齢化	患者教育
5				

【文献】

- 1) 楠井賢造, 上出正信: 重症多発性神経炎を伴った頑固な出血性下痢 潰瘍性大腸炎の治癒例. 総合臨床 1960; 9: 580.
- 2) 楠井賢造: シンポジウム 非特異性脳脊髄炎症 討論要旨. 日内会誌 1964; 53: 820.
- 3) 椿忠雄, 豊倉康夫, 塚越広: 腹部症状に続発した Subacute Myelo-optico-neuropathy の臨床的並びに病理学的研究. 日内会誌 1964; 53: 779.
- 4) 高須俊明, 井形昭弘, 豊倉康夫: SMON 患者にみられる緑毛舌について. 医学のあゆみ 1970; 72: 539.
- 5) 井形昭弘, 高須俊明, 豊倉康夫: SMON 患者糞便中の緑色物質. 医学のあゆみ 1970; 72: 637.
- 6) 吉岡正則, 田村善蔵: SMON 患者の緑色色素の本態. 医学のあゆみ 1970; 74: 320.
- 7) 椿忠雄, 本間義章, 星充: SMON の原因としてのキノホルムに関する疫学的研究. 日本医事新報 1971; 2448: 29.
- 8) Shiraki H. Neuropathological aspects of the etiopathogenesis of subacute myelo-optico-neuropathy(SMON). In :Vinken PJ, Bruyn GW. editors. Handbook of Clinical Neurology. Amsterdam: North-Holland; 1979. vol.37,p141.
- 9) 井形昭弘, 豊倉康夫: キノホルムによる神経系障害に関する研究 キノホルム静注家兎における末梢神経障害. 医学のあゆみ 1970; 75: 309.
- 10) 立石潤, 池田久男: キノホルム経口投与によるイヌの慢性中毒症状について. 医学のあゆみ 1971; 76: 611.
- 11) 立石潤, 池田久男, 斎藤章, ほか: SMON と同一の脊髄後索変性を示した慢性キノホルム中毒犬. 医学のあゆみ 1971; 77: 205.
- 12) 松岡幸彦, 小長谷正明: スモン患者 194 例の過去 10 年間の追跡調査(1990-1999). 医療 2000; 54: 509.
- 13) 小長谷正明, 松岡幸彦, 中江公裕, ほか: スモン終焉 30 年の臨床分析. 脳と神経 2002; 54: 473.

- 14) 小長谷正明, 松岡幸彦, 松本昭久, ほか: スモンの現状 キノホルム禁止後 32 年の臨床分析. 日本医事新報 2003; 4137: 21.
- 15) Konagaya M, Matsumoto A, Takase S, et al: Clinical analysis of longstanding subacute myelo-optico-neuropathy: sequelae of clioquinol at 32 years after its ban. J Neurol Sci 2004; 218: 85.
- 16) 松岡幸彦, 小長谷正明【スモン 神経難病の原点と今日的意義】 スモン Overview 神経内科 2005; 63:136.
- 17) 小長谷正明, 松岡幸彦【スモン 神経難病の原点と今日的意義】 全国スモン検診の総括 神経内科 2005; 63:141.
- 18) 今野秀彦, 高瀬貞夫【スモン 神経難病の原点と今日的意義】 スモンの神経病理学的所見 その再考察 神経内科 2005; 63:162.
- 19) 小長谷正明, 松岡幸彦, 氏平高敏 スモンにおける大腿骨頸部骨折の検討 神経内科 2005; 63:477.
- 20) 松岡幸彦 神経内科学 今日のスモン 医学のあゆみ 2005; 213 :286.